

庭と風景のあいだ 宮城俊作

・著者について

宮城俊作 (1957 ～)

奈良女子大学大学院教授を経て東京大学大学院教授。1992 年より吉村純一とランドスケープ設計事務所 PLACEMEDIA パートナー。
実家は宇治平等院で住職の一人。

序章 庭と風景のあいだ

・「庭」と「風景」二つの概念が発する意味の相互関係

庭……身体スケール、閉鎖的で明瞭な領域、パーソナル

風景…身体的な尺度では測れない、開放的で不明瞭な領域、コミュニナル

庭と風景のあいだには多義的な意味がある

その中でデザイナーは自らの立ち位置を変化させていく

第一章 職能の輪郭

ランドスケープアーキテクチャーの曖昧な職能観はどのように描かれるか

■環境と風景

環境…科学の対象 風景…美学の対象

本来出自の異なる二つの概念があたかも近しいものとして扱われてきたことが職能の輪郭を曖昧を曖昧にしている

→環境資源の**管理**とそれらの環境資産への変換、すなわち**デザイン**という行為を一連のものとして捉えようとしない限り、この職能の輪郭は曖昧なまま

■土地と場所へ

職能の輪郭を描くため、「環境と風景」の概念を「土地と場所」へと置き換える
※「環境」→「土地」、「風景」→「場所」とそれぞれ一対一で置き換えられるのではない

「環境にデザインの行為をもって働きかけることで風景が顕現する」



「土地という客観的空間領域にデザインの行為をもってはたらきかけることで、土地の中に主観的な空間領域である場所を生起させる」

第二章 ランドスケープと建築

■モダニストのランドスケープ観

F・L・ライト …… 土地を基本要素とした建築．内外の有機的な統合



コルビュジェ、ミース … 建築を土地固有の条件から切り離す．原理主義

サイト・デザイン = 原理主義的な建築を再定位するための土地に対する下ごしらえ

ノイトラ …… 住空間の戸外への延伸が、二分された建築と土地の関係を調停
しかし、ライトによる内外の統合とは大きく隔たっている



その隔たりをサイト・デザイン、その延長上のランドスケープ・デザインが埋めていく

■ランドスケープと建築の相互関係

ランドスケープ・アーバニズムとは
都市計画や都市デザインの主導権を、建築や土木からランドスケープへとシフトさせようという主張。20 世紀末から 21 世紀初頭に発生した。

初期のランドスケープ・アーバニズムの論説をもとにするとランドスケープと建築は対義的な四対の属性によって相対化できる (①～④)

- | | |
|----------------|-----------------|
| ① 土地の表層 | — 空間の形態 |
| ② 土地の水平方向の様態 | — 垂直的な造形意志 |
| ③ 要素の分散 | — 要素の集中 |
| ④ 変化するプロセスへの指向 | — 機能と形態の因果関係の表現 |

■相互補完関係への展開

ランドスケープと建築が相互補完的に展開できる可能性は大きく2点にある

- 1) 両者の間に、どちらの基本的属性も兼ね備えた中間領域を想定すること
- 2) 建築空間を支える構造や造形がそのままランドスケープの基盤になっている状態を想定すること

第三章 意匠のパラダイムシフト

ランドスケープ・アーキテクチャー固有の意匠性を求める際、造園の意匠との共通性以外の視点をどこに求めるべきか

・五つのコンセプト

地域性、多様性、持続可能性、レジリエンス、物語性

これらのコンセプトはヒューマンスケールに留まらず、伸び縮みするスケールの中で多様な視点が求められる

第四章 アーバンネイチャー

■エコロジーとランドスケープ

マップやデジタル画像といった環境の視覚的発現形は、いかに美学的な意味や価値を持った空間や景観の創出に応用することができるか

・開発と保全の対立構造を超えた視座

人間の活動も生態系の一部であるという認識を前提に、自然と人間の相互作用からエコロジーを環境創造的に捉えられるのではないか。

→開発と保全の間に発生する矛盾を調停することだけがエコロジカルランドスケープにアプローチする方法ではない

■都市空間における生物多様性の表現

持続可能な都市の環境文化を創出するうえで参照すべきイメージとは何か

1. 里山にみる変化する相観
2. 緑地にみるハビタットの平面形
3. 市街地にみる多様なヴォイド
4. 工法と素材にみるスケールを横断する多孔質

生物多様性のイメージを都市空間に写しかえるデザインによって成果を得るために必要な3つの条件

1. ハビタットをスケール横断的にデザインできるような機会と仕組み
2. ハビタットの状態は常に変化するものであることを受け入れること
3. 空間や景観に対する審美的規範のようなものが市民のあいだで共有される

■次のデザインリテラシー

三次自然とは

所謂ブラウンフィールドに出現する「自然」のかたち。確固とした基盤がない特殊な条件下にあり、一次、二次の自然に見られるような植物遷移のプロセスを踏まない。

三次自然のデザインでは、これまで創造のための道程でしかなかった自然の動態的な「**プロセス**」がデザイン行為の主題に踊り出るのではないか。

三次自然をいかに扱うか

■Re・vegetation へ

三次自然的な現象を取り込もうと場合、都市の自然は従来の緑化という概念を超えたものになるのではないか

green の色彩記号的な意味が全面に押し出されていること、緑化を平面的な面積の数量のみで評価していることへの問題提起

→植物群の立体的な配植形態、植栽基盤、土壌なども含む**断面的な評価**へ

緑化に代えて、**Re・vegetation** = 植栽の再生 へ

第五章 歴史都市のランドスケープヴィジョン

・奈良……条坊制の街路パターンが未だに残る

それらをフロッターージュするようなかたちでのランドスケープの提案

→他の歴史的風致をもつ都市のデザインにも普遍的に当てはまる

・京都……京都盆地を取り囲む山々と鴨川から、坪庭の手水鉢と添えの緑までスケール横断的に自己相似性をもった山と水の関係が見られる

→広域的な水と緑の関係は、インフラとしてのランドスケープの未来を先取りし得る

第六章 レジリエンスとランドスケープ

・震災復興に関わる二つのスケール

1. 震災の発生からの時間の経過

2. 被災した個人の身体周辺から国土に至る空間の広がり

東日本大震災では津波により人為的な構造物や土地造成による凹凸が削り取られ、土地の出自とそこに刻まれた土地の履歴が明らかにされた

→自然立地的な土地利用、経済再生を図ることがレジリエンスの獲得につながる

流域を単位としたエコロジカル・エリアと近代以降に発生したコミュニティ・エリアにズレがある場合、そのズレをどのように調停したらよいか

ズレを整復、あるいはズレによる矛盾を止揚するためには、環境マネジメントの在り方に基づく新たな土地利用のカテゴリーを確立することが有効ではないか

→広大な災害危険区域の土地に新たな土地利用のかたちとして「パーク」を構想

レジリエンスをデザインに形象するためには何が必要か

レジリエンスには回復力、復元力という意味がある。したがってレジリエンスを形象するランドスケープには、回復のための**時間**と**プロセス**が内包されるべき

第七章 サステナビリティの表象

都市公園の陳腐化、維持管理の負担が課題になる中、新たな都市公園のあり方を描けないだろうか

・二つの属性の転換……土地の上下転換、経済価値の転換

・公園のデザインの再定義……公園の内側ではなく外側の状況に対応する
→施設ではなく基盤のデザイン、ディテールデザインへの意識、緑の価値の相対化

■Gray × Green = Landscape Infrastructure

既存のインフラは老朽化が問題となるとともにスペックが過剰となっている面もある
→グレーインフラを費用対効果の高いグリーンインフラに置き換えていき、面的広がりを持ったランドスケープインフラを形成することの提案

終章 補助線のデザイン

ランドスケープをデザインする行為は人と土地、人と自然、人と暮らしのあいだに補助線をひくこと